

絵本の読み聞かせから、始まった

今週の選者／作家 志茂田景樹さん

母が優しい声で物語る、おぼろげだけど心地いい記憶。僕の読書の原体験は1歳頃から母がしていた絵本の読み聞かせです。寝かしつけるためだったようですが、途中で切り上げようとすると泣き出すので毎回一冊は読まされたそうです。でも母自身も楽しんでいました。読み聞かせは読む側も自分が発する音を体感すること、自然に物語に没頭でき、豊かな気持ちになるんです。僕が今、読み聞かせを広めているルーツがここにあります。

読み聞かせしてもらった懐かしい本ばかり。鮮明に記憶がよみがえっていくことが衝撃的で、夢中でページをめくりました。中でもピーター・パンは特に印象的な作品です。星空を越え、ネヴァーラ



Shinoda Keiichi

小学校の頃は、ガリヴァー旅行記や十五少年漂流記などの、ジュニア向けの名作や伝記を読んできました。当時凝っていたのが、主人公のその後を自由に空想すること。たとえばアレキサンダー大王が、もし中東を越えて日本に来ていたら。白馬に乗って富士山を見上げ、何て言っていただろう……。ブランコに乗って、そんな空想にふけることがしばしばありました。

物語の脇道に入り、イメージを膨らませること。は、その後もしていました。中学の頃、『戦艦大和ノ最期』を読んだ時も、ストーリーよりも、「厨房はここにあって料理担当の兵士が働いていたんだ」など考え、頭の中の戦艦の構造図に描き込みを加えていくのが好きでした。

友人の一言で小説家の道へ

高校になるとあまり熱心に読書はしませんでした。むしろ映画にのめり込み、高校では映画研究会の部長を務めたくらいで、西部劇が大好き。邦画も元気な時代でした。大学に入ってから、俳優の学校に通いながらエキストラのバイトをするなど忙しい毎日。卒業後は弁護士事務所働いたりセールズをしたり、職を転々としていました。

ある時、学生時代に知り合った早稲田大学の友人の家に一升瓶の酒を持って遊びに行ったときのこと。彼はいわゆる哲学青年で、その夜は同人誌に掲載するための原稿を書いていた。

茶碗酒と一緒に一杯やって休憩していると、彼が「これ、続き書いてみるよ」なんて言い出す。読むとちよつとシュールなショートショート風の小説です。その後は二人ともこたつで寝ちゃったんですが、翌朝、彼より早く起きた僕は冗談を真に受け、なんとなく続きを最後まで書きました。

起きた彼は「え、書いたの!？」と驚き、目を通す。だんだん真顔になり、読み終えると「きみ、小説書けるんじゃないか」



志茂田景樹さんのベスト10

1位



『ピーター・パンとウェンディ』

ジェイムス・M・バリー作
F・D・ベッドフォード画 石井桃子訳
福音館書店 1900円「原作は大人も楽しめる内容。
母親が読んでくれたのは子ども向けの絵本です。各社の絵本を読み比べるのも面白い」

2位



『晩年』

太宰治著
新潮文庫 520円

「おとし話風や私小説風の作品などバラエティに富む内容。太宰も書きたいジャンルがたくさんあったのだと感じます」

3位



『紫苑物語』

石川淳著
講談社文芸文庫 980円
「表題作の冒頭、『国の守は狩を好んだ』は印象的な一行。谷間に鬼の歌が響くラストシーンの描写も素晴らしい」

4位

『三国志』全5巻
吉川英治著
講談社文庫 各933円

「高校時代に唯一、図書室で読みふけた本。欠巻がありやきもきしたのも良い思い出」

5位

『レイテ戦記』

上・中・下
大岡昇平著
中公文庫 上巻838円

「とても丹念に書かれていて、記録文学としても最高峰。戦死した兄のことも考えます」

6位

『戦艦大和ノ最期』
吉田満著
講談社文芸文庫 940円

「『戦艦大和』のスケールに驚きました。じっくり時間をかけて読んだ記憶があります」

7位

『東海道中膝栗毛』
上・下
十返舎一九作
岩波文庫 上巻900円

「小学校高学年で手に取り、繰り返し読むうち面白くなり、声を出すほど笑った作品です」

8位

『谷間の百合』
バルザック著 石井晴一訳
新潮文庫 750円

「少年期に読み、ヨーロッパとの違いを実感。抑えた恋愛の描写が逆にたまめかしい」

9位

『墮落論』
坂口安吾著
新潮文庫 520円

「保険調査員時代に手に取った一冊。著者の論は僕自身の考え方に近いと同調しました」

10位

『桐島、部活やめるってよ』
朝井リョウ著
集英社文庫 480円

「ゆとり世代に興味があって読みました。僕の高校時代と変わらない部分も感じて新鮮」

つつづやいたんですね。彼も成り行きで軽く言ったことだと思っただけで、なぜか僕の心にはその言葉が突き刺さり、後に小説家を目指す後押しになった気がします。石川淳の『紫苑物語』は、そんな彼が絶対読むべきと薦めてくれた本です。

生涯で最も真剣に、濃密に読書に時間を費やしたのが28歳以降、保険の調査員の仕事をしていた

時です。北陸など地方への出張が多く、当時はローカル線の終点からバスでさらに2時間も行った先が目的地、なんてことがよくありました。とにかく移動時間が長く、暇つぶしは読書しかない。

古典から流行りの小説まで何でも読みました。太宰をじっくり読んだのもこの時期。短編が好きで『晩年』が秀逸です。実は小学生の頃、三鷹で

太宰を何度か見かけたことがあって、独特なオーラを感じたのを覚えています。入水自殺の時には当時住んでいた小金井周辺でも騒ぎになったのが記憶にもあり、思い入れの深い作家です。

文芸雑誌や小説雑誌もよく読みましたが、掲載される新人賞受賞作に目を通すと「このくらいで賞がとれるのか」と軽く考えて（笑）。そこから

Column

最近読んだ1冊



『白蓮れんれん』

林真理子著
集英社文庫 667円

「デビュー作以来、彼女の作品はわりと読んでいます。柳原白蓮と年下の恋人、宮崎龍介の間で交わされた700余通の恋文を参照して書かれた小説。手紙の内容を資料としてきちんと咀嚼して描写してあるから読みやすい」

自分でも書き始めるようになり、29歳で初応募し、二次予選を通過。結局、受賞までには7年かかりましたが。

この時実は、僕は自身とじっくり向き合っ

ていたのかなと思います。本を通して、自分の感性や考え方を検証する時間でした。結果小説家になり、この後の生き方も大きく変わることになりました。

(構成/佐藤太志)